

けん玉におけるまちづくり

第1章 はじめに

1-1 長井市とけん玉

山形県長井市のけん玉を使ったまちづくりについて調査するために12月の10～12日の3日間を利用して訪問した。そもそもなぜ、長井市がけん玉を利用したまちづくりを始めたのか。あまり知られていないと思うが、長井市は競技用のけん玉の生産量が日本一位だ。市内には有限会社の山形工房というけん玉の会社がある。山形工房の作るけん玉は「大空」というブランドで世界中のけん玉プレイヤーから愛されている。今日けん玉は世界で広く遊ばれておりグローバルに展開している背景を踏まえ、長井市はけん玉を地域資源としけん玉を活かしたまちづくりを始め、そしてけん玉を通じて市民の well-being の追求をしている。

1-2 世界でのけん玉流行

今けん玉が世界で熱い。けん玉はカップや剣に乗せたり刺したりして遊ぶものだ。おそらく日本人であれば一度は何かしらの機会で見にしたことがあるだろう。中には保育園や学校で遊んだことがある人もいるかもしれない。多くの人にはけん玉といえば昔のおもちゃとイメージするだろう。しかし、そんなけん玉は世界でとんでもないブームを巻き起こしている。背景知識としてけん玉の紹介をここでしておきたい。

2009年に世界中に衝撃を与えたある動画が登場した。それはアメリカのコリン・サンダー氏が公開したものである。この動画は彼自身のスキルの高さを示したのはもちろん、映像や音楽と組み合わせたけん玉の動画は世界中の人を魅了し、新たなけん玉シーンが誕生した瞬間であった。

コリン氏がけん玉を始めた頃、日本でけん玉に出会った別の若者が Kendama USA という団体をつくり、けん玉の通信販売を始めた。コリン氏は Kendama USA と協力し、アメリカでの普及活動をしている。Kendama USA は世界中のけん玉ブームを語るには欠かせない存在である。けん玉の新しいカルチャーは様々な要因がある。しかし、Kendama USA の存在はその要因の割合の多くを占めている。彼ら抜きでは今のけん玉シーンを語ることはできない。

現在、けん玉のメーカーは Kendama USA を筆頭にアメリカ以外にも増え、香港、台湾やイスラエルなどのアジア諸国にも広がっている。けん玉一本の価格が100ドルを超えるものも数多く存在している。アメリカやヨーロッパではプロチームが結成され、全米大会やヨーロッパ選手権等が開催されている。

2014年には広島県の廿日市市でけん玉のワールドカップが開かれた。なぜ廿日市市で開催されたかと

いうと、廿日市市はけん玉発祥の地とされているからである。2014年以後、毎年廿日市市が開催地となり、ワールドカップが開催されている。2017年も廿日市市での開催がすでに決まっている。そんなけん玉ワールドカップ、第1回大会では、日本で開催されたにもかかわらず、アメリカ人が優勝した。圧倒的なスキルと技の正確さ、これらが海外のけん玉のレベルの高さを改めて実感することになった。

1-3 けん玉を使ったまちづくり

このように、海外ではけん玉がかなり定着している。自分らの知っている昔からのけん玉のイメージとはほとんど違い、海外ではBMXやスケボーのようにクールなおもちゃとして認知されている。美しい景色の前でトリックをカメラで撮影し、その動画にEDMやhip-hopのようなクールなBGMを流して編集しYouTubeやInstagramで公開するのが新しい楽しみ方だ。それ以外にも技を競ったり、スケートボードのSKATEゲームのようなKENゲームなどもある。

日本の伝統的なおもちゃが海外で注目され始めた。その中でけん玉を地域資源としまちづくりをすることは、けん玉界にとっても大事なことである。これは自治体だけではなく、市民やNPO団体、企業などの協働が必要となってくる。この取り組みが上手くいけばけん玉以外の資源、例えばヨーヨーやコマなどの他のモノに応用できる可能性がある。前例のないプロジェクトであるが、成功した時のリターンはかなり大きい。そして何よりも新たなけん玉の文化を創出し普及させるためにも、この取り組みは大切なプロジェクトであると強く感じている。

まちづくりや地域おこしは1年や2年で完成するものではなく、長いスパンで考えていかなければならない。そのことを承知の上で長井市の現状を知りたかったため、直接訪問した。机の上だけではわからないことは多く肌で感じることは大切である。そのほかにも自分でしっかりとプランを立てて新幹線のチケット購入やホテルの予約、訪問先へのアポイントメントなども初めての経験で勉強になった。実際に地域に足を運んでみて多くのことを勉強でき非常に実りのある研修であった。

第2章 1日目 12月10日(土)

2-1 長井駅

午前11時ごろ長井駅に到着した。長井駅に着くと雪が降っており時間が経つごとに地面の雪はどんどん積もっていた。東京で生まれ育った私は雪を見ると東北地方にきた感覚があった。改札を出ると小屋のような駅で中の売店で大空のけん玉が売られている。

駅を出て片側一車線の通りを歩くと、茶色の屋根で窓の大きな白色の建物をした喫茶店が見え窓側にけん玉が飾られていた。それを見て私は、地域がけん玉とゆかりがあると強く思った。けん玉プレイヤーの私からすれば常にけん玉に対してのアンテナを張っているため些細な隠れけん玉にも敏感に反応

をすることができる。しかしながら、客観的に見ると、けん玉を普段やらない層にとってはけん玉を見ても何も思わずスルーしてしまうのではないかと感じた。それでも地元長井市が試行錯誤をしてけん玉をどうにかしたいという地域の思いは感じることができた。

2-2 けん玉広場 Spike

駅からまっすぐ100mほど歩くと、青い建物がある。そこがけん玉広場 SPIKE だ。

Spike は地域のけん玉のまちづくりをするために空き家を利用してできた施設。中でけん玉で遊ぶことができ無料で日本けん玉協会オフィシャルの級や段の審査を受けられる。有料ではあるが、けん玉のペイントもできる。またヨーロッパやアジアなどの世界各国のけん玉や数十年前の古いけん玉など珍しいけん玉もいくつか展示されている。もちろんけん玉の購入もできる。基本的に家賃や光熱費は市が負担しており、施設の運営は地域おこし協力隊の秋元悟さんが行なっている。

2-3 地域おこし協力隊

地域おこし協力隊とは、都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を移動し、生活の拠点を移した者を、地方公共団体が「地域おこし協力隊員」として委嘱。隊員は、一定期間、地域に居住して、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこしの支援や、農林水産業への従事、住民の生活支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組。（総務省 HP より）

秋元さんは2016年の4月から山形県の長井市に地域おこし協力隊として長井市に移住した。それまでは東京の青梅市に住んでいた。私と同じ地元であり、そのおかげで前から親交があった。秋元さんは日本けん玉協会の6段の最高段位を持っている有段者で、2008、2009年のパフォーマンス大会で日本一位になった。そして、2014年に広島で開催されたけん玉ワールドカップでは世界3位で日本人1位という結果を残した。今回、私は秋元さんに同行しながら、市のけん玉におけるまちづくりの現状を調べて行った。

初日の土曜日は、Spikeの取材と運営の手伝いをした。この日は先ほど述べたように雪が降っていたが、それにも関わらずに自分を含め県外からは4人のゲストが来ていた。市内からは親子が2組来た。いつもは秋元さんが中心となって技を教えたりする。この日は私も一緒になって教えた。玉を持ってけんを前に振って玉の穴に刺す「ひこうき」や紐を使った派手な技などをレクチャーした。こうして、1日目はSpikeの取材と運営補助をして終わった。取材してわかった課題などは後でまとめようと思う。

第3章 2日目 12月11日(日)

3-1 山形県のイベント参加

二日目は山形県で行われるイベントに参加するため Spike は休業になりそちらに向かった。参加したイベントは下記の内容である。

「はばたけ世界へ 南東北総体 2017 プレイベント」

来年7月、山形県・宮城県・福島県の南東北3県で開催される全国高校総体に向けて、プレイベントを開催します。

アスリートゲストとして、今年のリオデジャネイロオリンピック陸上競技4×100mリレーで銀メダルを獲得したケンブリッジ飛鳥選手を招いてのトークショー、高校生によるステージ発表や高校生が作った農産物・農産加工品・軽食の販売・振る舞いなど、楽しいイベントが盛りだくさんです。

◆日時：12月11日(日) 午前10時～午後3時

◆会場：山形ビッグウイング(山形市)

◆内容

・ステージ発表(競技種目紹介、高校生による演奏・ダンス・ファッションショー・書道パフォーマンスなど)

・高校生が作った農産物・農産加工品・軽食の販売・振る舞い など

・学校紹介、3Dプリンタの実演、LEDライト製作体験 など

◆その他：入場無料・事前申込不要

このイベントは高校や市町村が様々なブースを催していた。主に県内の高校がメインに出展し、カレーうどんや飲食店や地域の特産を販売するギフトショーのようなものでイメージは文化祭や学園祭に近い。他の自治体のブースも同じような催しをしていた。それと企業もブースを出しており、大塚製菓のブースがあった。大塚製菓は自社製品のポカリスウェットを無料で提供をしていた。ビッグウイングは体育館のような内装でステージがあった。そのステージでは県内のチアリーダー部やダンス、和太鼓部などがパフォーマンスをしていた。また、このイベントに陸上選手のケンブリッジ飛鳥氏がゲストとして来ていた。ケンブリッジ氏のトークショーは自分がちょうど昼食に行っていた時にしていたた

め見ることはなかったが、昼食から戻るタイミングにケンブリッジ氏と鉢合わせはした。

長井市はけん玉のブースを出展した。私と秋元さんを入れて 10 人ほどで運営を回した。秋元さん以外のメンバーは地元長井市でけん玉を使って地域活性化を図る人たちである。彼らは

運営としては、けん玉の体験会、パフォーマンスや販売のワークショップを終日おこなった。イベントのメイン層は高校生なので、私は多くの地元の高校生と関わることができた。長井市ブースの運営陣は基本的に 30 代の人間がほとんどである。なので年齢層の違う高校生と関わることでよりダイバーシティブな交流ができた。高校生世代は方言の訛りが弱く、人によっては完璧な標準語を話す人もいた。

3-2 都市と地方

一番地方に来たという感覚になるのはやはりその土地の方言を聞いた時である。一部の地域やエリアでは感じることはできるが、大概まちを見るだけでは地方を感じることはない。日本の地方でも、ハンバーガーや牛丼チェーン店、コンビニ等があり便利になっている。私が今回訪れた長井市もコンビニがいくつかあり、某牛丼チェーン店が 1 店舗あった。正直なところ、これらは生活を大変便利にするものであり、これらがまちにあればそこまで不便を感じない。しかし、このような便利であるがゆえのチェーン店はまちをどこも同じ景色にしてしまう。まちの普遍化を引き起こしてしまう。またそれはナショナル単位で引き起こされるのではなく、グローバル単位で起きる。

私が韓国のソウルに行った時、どこにでもマクドナルドやスターバックスはあった。マレーシアのクアラルンプールに行った時もマクドナルドやスターバックスはある。世界中どこへ行っても同じ味を同じくらいのサービスで受けることができる。しかしチェーン店は便利であるが、どの地域に行っても同じものがあるとその地域の特殊性や特別性は失われてしまう。便利であるがそれらはどこへ行っても町並みが等しいことは少し寂しさを覚えてしまう。そこにグローバル化へのジレンマを感じる。

どこでより地域らしさを狙うのかが外貨の獲得には欠かせない。地域の差別化を狙うためのけん玉は一つの助け舟にはなるだろう。

3-3 山形県民のけん玉偏差値

イベントでワークショップを開いていて思ったのは、山形県民は全体的にけん玉のレベルが高い。多くの高校生は、もしかめが上手であった。もしかめとは大きいお皿と小さなお皿を交互に乗せていく技である。けん玉には技がやりやすいように標準的な技の持ち方がある。彼らはその標準的な持ち方をすでに知っており、お皿に乗せる技やけんに刺す技などできていた。中には玉の上にけんに乗せる灯台やけん先とお皿の淵に乗せるうぐいすなどの上級の技にチャレンジしている高校生もいた。彼らに「なぜけん玉が上手なのか」と話を聞くと彼らは、小学校の頃に学校の授業や学童などでやっていたらしい。東京でも同様に小学校や学童でもけん玉を取り入れているが、東京よりも上手な人が多い。やはり山形県は、長井市を中心にけん玉の文化が他の都道府県よりも根付いていると感じることができた。

私がもう一つこのイベントで感じたことは、山形県の高校生はけん玉に対してとても反応が良かった。私は東京などの首都圏でけん玉のワークショップを開くことがある。その時と比較すると東京よりも食いつきが良い。理由としては、先ほど述べたように彼らがけん玉の経験があり、技ができてしまうからだろう。それと東京との一番の違いは娯楽の量だと思う。東京よりも娯楽が少ない地方では、何か遊ぶにしても色々と制限されてしまう。そこでけん玉があるとやってみようという気持ちになるのかもしれない。自分がワークショップを開く時はストリート系のけん玉を意識している。けん玉をクルクルと回したり、上から下に向けて球を刺すような派手な技だ。そこで今回みたいに従来のけん玉ではなくストリート系の今風のけん玉を見せることは、かなり新しく刺激的になったに違いない。

1日中を通してのけん玉ワークショップは成功だった。高校生の反応は良かったし、長井市がけん玉の取り組みをしていることを県内の高校生にアピールできた。個人的にもワークショップを通じて地域の高校生と交流できたことは非常に価値のある経験であった。

第4章 3日目（最終日） 12月12日(月)

4-1 市役所訪問と企業訪問

最終日の日も雪が降っていた。ちょうど自分が山形に来てから降り始めという感じだった。3日間を振り返ると、山形での雪の経験は良かったと思う。東京ではなかなか味わえない経験であるし、今後東北地方に移住をするのであればいい目安になる。

研修に行った三日間は雪かきをするほどではなかったが、もし自分の研修が一週間遅ければ、雪かきをしなければならなかったかもしれない。東京でも雪が降った日は雪かきをするが、それは年に数回程度である。なので、ちょっとしたイベント感覚で楽しむことができる。しかし、それが毎日続き冬を越すまでやるとなると、肉体的にも精神的にも厳しいものがある。やはり、現地に行かないとわからないことはたくさんある。

最終日のこの日は長井市役所と山形工房にそれぞれ一時間ずつ訪問した。長井市役所は二つの建物がある。観光課は第二庁舎の方であった。中は普通の市役所という感じだった。市役所の位置は、Spike及び長井駅からは近く徒歩で行ける距離であった。今回の様々な移動は秋元さんの車で移動しているがこの日も秋元さんに連れてってもらった。市役所内の会議室でインタビューをさせてもらった。職員の方2名の方が一時間ほど取らせていただいた。この時の話の内容に出た問題点はまとめて後述しようと思う。

市役所の次は山形工房へ向かった。市役所から車で20分くらいの距離である。急な連絡であったが一時間ほどお仕事の時間を縫ってもらい社長の梅津さんとお話させてもらった。市役所と山形工房の訪問を通じて、もう少し事前準備をすればよかったと思った。話したいことは山ほどあるがしっかり聞きたい話の優先順位を決め、しっかりタイムマネジメントしなければならない。この反省は次回に繋げたい。山形工房の後はSPIKEに戻り、スパイクの近くにある喫茶店でカレーを食べ昼食を取った。昼食後は秋

元さんと今後の話をしながら帰りの新幹線の時間までを過ごした。

第5章 課題と今後の展望

5-1 課題

長井市内には、けん玉の会社が一つしかない。有限会社山形工房のみである。そのため市がけん玉を使ったまちづくりを進めた際、長井市は一つの会社の山形工房を優遇しているように見えてしまう。市内の他の会社にとってはやや不公平と思っても仕方がない。市のけん玉の取り組みに直接的な反対をするような人はいなくても、行政としてはそこにやりにくさが残る。

市内にけん玉以外の地域起こし協力隊はいるが、それぞれバラバラの市役所の課に所属している。他の課にいる協力隊や協力隊を動かしている人同士の連携はあまりなさそうに見える。アプローチの仕方は違えども、まちを活性化しようとする目的は同じであるはずだ。市や県で隊員の情報の交換等の機会などを設け交流を深めていけば、まちづくりがより鮮明になるのではないか。

地域おこし協力隊全般の問題点だと思うが、地域おこし協力隊の稼ぎ方に非常に疑問が残る。地域おこし協力隊の副業は禁止されていない。しかし、公務の業務と副業の線引きが非常に難しい。任期の三年が終わった後、隊員たちはどのように稼ぐのかが地域おこし協力隊の一つの課題である。

5-2 観光について

観光について思うことがあった。市役所の観光課では、市内の地域資源を生かした観光プランを策定している。もちろん彼らは市の業務なので、観光プランを市内だけで完結しがちである。しかし、観光客として、特に新幹線まで使ってその土地をおとずれた身からすれば、その市だけで観光を終わらしたくないと考えるのが普通なのではないか。例えば、北海道に訪れた観光客は札幌だけではなく、レンタカーで函館や富良野に行ったりするようなことだ。100kmから150kmはレンタカーがあれば普通に回るだろう。長井でいえば米沢と複合した観光プランを考えた方が観光客を獲得しやすいのではないか。つまり、広い視野でもっと他の地域との連携を取ることが大事だと私は考える。

5-3 研修が終わって

自分の初のフィールドワークということで、今回は地方のリアルな現状を知ることができた。この経験を生かし今後の専門演習や授業にもつなげたい。自分に足りない課題はたくさんある。一方で今回2日目のワークショップのように自分でも地方の役に立てるものはあるはずだ。今の自分でもできることをたくさん発見していきたい。長井市はこれからもけん玉を使った様々なチャレンジをしていこう。そして、2017年の3月には長井市でけん玉の大会を開くみたいだ。これからも長井市のけん玉の取り組みには注目していきたい。

最後に秋元さんには大変お世話になった三日間である。それ以外にも自分に関わっていただいた長井の方々には大変感謝している。この場を借りて感謝を申し上げたい。

参考文献

窪田保 2015 『けん玉学』 今人舎

けん玉で世界をつなぐ 一般社団法人グローバルけん玉ネットワーク HP

<https://www.gloken.net/jp/>

けん玉、ストリート系男子はまる 音楽流し技披露 米国発、新たなファッションに

<http://style.nikkei.com/article/DGXNZ059810170X10C13A9HR0A00?channel=DF130120166014&style=1>

なぜ、世界のストリートシーンで「けん玉」が受け入れられたのか？

<http://news.livedoor.com/article/detail/11280860/>

総務省 HP・地域力の創造・地方の再生

http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html